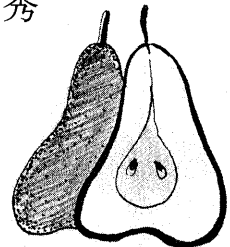


心が育つということ その(2)

幼児の持つ「内ー外」意識の変容をめぐって

豊田 一秀



(4) マージナルなもの、その1 Bの指しゃぶりと、毛布への愛着をめぐって

Bは、生後三か月ぐらいから、指しゃぶりを始めた。

そして、一歳を過ぎてから右手の親指をしゃぶる時、同時に左手には愛用の毛布を握っていないければならなくなる。どんな時に指しゃぶりが始まるか考えてみると、眠い時、疲れている時、不機嫌な時、悲しい時、病気の時などである。これらのことからわかるように、Bは自分が精神的、肉体的に危機的な状態に追い込まれたとき、指しゃぶりと毛布を必要とする。そして、この行為によって自分を整え、安定させる。自らが安定すると、この行為は必要でなくなる訳である。

Bにとつての順調な時と危機的な時を想定した場合、危機的な時に身を置いた自分を、守り、整え、その状態を順調な時の状態へ、修正する力を持っているものが、この指しゃぶりと毛布への愛着なのである。眠い時を例にあげて考えてみるなら、元気な時にはそれを必要とはせず、眠くなると必要となり、眠り込んでしまうとまた必要でなくなるというパターンをとる。この場合、それぞれの「時」は、その子どもにとつての心理的な「状況」と見てもよいであろう、そうであるとすれば、この状況を、その時に臨んだBの内的な世界と置き換えてもよいであろう。

Bは、三歳六か月を過ぎた今日、指をしゃぶり、毛布



▲ Bの指しゃぶり

を愛撫する頻度が少なくなってきた。前述の考え方にそって考えるならば、以下のような解釈が可能であろう。

(1) それらがなくとも、危機的状态を耐え、乗り越えられるようになってきている。

(2) 以前であったら、それらを必要としたような危機的

状態に遭遇しても、それを危機的な状態とは感じなくなっている。

いずれにしても、この減少傾向は本人の努力や訓練、学習によるものではない。あえて言うならば、外在的な物質であった毛布を、Bが内的なものとして、心の中に定着させつつある結果であると言ってもよいであろう。そして実際場面において、以前よりも危機的な場面を、危機的な場面として意識することが少なくなっているのである。

ここで、私が興味を引かれるのは、Bにとって、なぜ指しゃぶりと毛布への愛撫が、相互不可欠なものとして、同時に行われなくてはいけないのかという事である。このような二種類の組み合わせを必要とする例は、他にもよく見られることである。例えば、下くちびるを吸いつつ、片手は母のまぶたに触れる、下くちびるを吸いつつ、片手は服の角を指の腹で触れる、といった例があげられる。

これらの間に共通なことは、自分の身体(指、唇)を

使用しつつも、一方では自分以外の物（毛布、服、母親のまぶた）も同時に不可欠であるという点である。もしも、両方共に自分の身体で済ませることができれば、より容易に、いつでも、どこでも、この行為を行え、都合がよさそうなものであらうに、と私には思えるのだが。事実、Bは指吸いが必要となった時、毛布なしで指を吸うことはできずに、ヒステリックに「毛布は？毛布は！」とたずね続け、辺りを捜し回る。

私は、ここに、愛着対象が同時に二つあり、それらが相互不可欠であることの意味を感じる。一方で自分を確かめながら、同時に他方では、外在する物を自分でコントロールしつつ、自分の一部に取り込もうとする姿勢を、私はそこに見るのである。

ポウルビィ（一九八〇）は、その著書の中で、指しやぶりと毛布への愛着について述べている。彼は、指しやぶりを非食事的吸引、毛布への愛着は無生物への愛着行動と位置付けた上で、それらは、母親（愛着人物）に対する「代理対象」であるとしている。しかし、ここで注

意しなくてはならないことは、それを母親の愛情不足による、子どもの欲求不満の現れである、と一面的に彼は捉えているのではないということである。むしろ指しやぶりと毛布への愛着も、母親への愛着そのものと同じように、あらかじめ愛着対象を求めるように、子どものなかにプログラムされている結果であるとポウルビィは考える。この事は、例えば、子どもの指しやぶりが、実際に乳首を吸う以前の胎児にすでに見られることからもうなずけることである。この点についてポウルビィは、同じ本の中で次のように語っている。「母親に対する、子どもの結びつきは、母親がある結果をもたらす対象とみなして接近しようとする行動システムの一つの所産である」。これを我田引水的に解釈するならば、幼児は外界を、各人の内的な世界へ取り込んで行こうとする潜在的なプログラムを持っていると言うこともできよう。（ポウルビィは、愛着行動に関して、比較行動学の研究を援用しつつ、従来支配的であった二次的動因説に対し、愛着行動制御説を主張している。）

(5) マージナルなもの、その2 Bとドロたんこ

〈事例1-4〉

少し早めに保育園に子どもを迎えに行く。昼寝からさめたばかりのBは、私をみつけてビックリ、喜んで、膝の間に割り込んで抱きついて来る。園の流れとしては、昼寝の後はフトンをかたづけたり、おやつを食べたり、帰りの集まりがあったりするのだが、それにもかかわらず、Bはそれ以後、保育園の流れには一切乗らず、先生の誘いかけにもまったく従わない。そして私にただただ、だっこを求め離れない。保育の場に私がいても、また、いなくても、同じ振舞いをBがすることを望む私としては、このBの強く依存的になっている状態は受け入れ難く、私はイライラさせられる。私がイライラしていることが、すぐにBにも伝わら、Bをさらに強く私にしがみつかせ、それが又私をイラつかせる、という悪循環がそこに生じる。ついにBは大声で泣き始める。私はクラスへの遠慮からBを抱いて、誰もいない遊戯室へ連れ出す、Bはそこで抱かれたまま園庭を見つつ、ひとしきり大泣きする。しばらくして泣きやむ

と、Bは自分から降りて、素足のまま園庭の大きなスベリ台の下に行く。そして半乾きになっているドロの塊を、いくつか手にして来る。(Aに聞く所によると、昼間、五歳児がそこでドロ遊びをした時に、Bも参加して楽しいひと時を持ったそうである。)私は、丁度持っていたビニールの袋に、それらを入れて、手に持たせてやる。Bはそれを持つと自分から部屋に戻り、あとはクラスの流れに従い、先生に挨拶をして降園する。(Y保育園)

Bは、保育園生活の中に自分を添わせていたのだが、思いがけず、早く迎えに来た父親を見て、ホッとした瞬間に、自分の置かれている場を、「外なる」場と感じてしまったのだろう。そのように、Bの気持ちに変化する時、それまで慣れ親しんでいた周囲は、瞬時に不安な世界へとその「みえ方」を変貌させ、その不安がBを私にしがみつかせる。しかし、自分を支えてほしいと、その時感じた唯一の相手である父親は、いつになくよそよそしく、安心感を与えてくれない。Bにしてみれば、急に

不安定な世界に放り出された不安と、支えてほしい相手に受け止められないという、二重のショックがBをさらに動揺させたのだろう。その混乱したBの世界を統合させたのは、泣くという一つのカタリシスと、もう一つは、「間」としての時間であり、さらには、昼間、保育園で楽しく遊べた事の象徴である、半乾きのドロだんごを、手に持つということであったと言えよう。私の出現によって、急に外なる世界になってしまったBにとっての保育園という場を、再び以前の状態に戻すためには、あの自己充実した時のシンボルであるドロだんごを、Bは手に持ち直す必要があったのだろう。その意味で、このドロだんごは、Bにとって、二つの世界を統合する架け橋——マージナルな物質であったのだと思う。

また興味深いことは、帰る時にBが手にしているドロだんごを見て、その活動を共にしたという二、三人の年長組の子どもが、一様にそれをほしがったという事である。大きい子どもにとっては、三歳のB程にはそれを家庭に持ち帰る必要はなかったであろうが、程度の差こ

そあれ、やはりその物が、家に持って帰りたい気持ちで起こさせる「何か」であったことにおいて、年の差を超えた共通な思いがそこにあったのだろう。

園で作ったものを家に持ち帰りがる子どもの姿は、私の知るいくつかの保育現場でも、よく見られる事である。特に印象深いのは、展覧会や作品展に備えて、教師が計画を立て、指導して作った作品を、作ったその日に、子どもが家に持ち帰りがることである。教師としては、展覧会の日まで、作品をためておく必要があるので、親に対する展覧会という思いも含めて、作品を持って帰られたくないという気持ちが働く。一方、子どもは、教師の熱気（エネルギー）がそこに注がれ、また自分としても、一日の多くの時を費やしてきた自分の分身である作品を、家に連れて帰りたくて仕方がないのだ。作品を園に置いておきたい教師、家に持って帰りたい子ども、作品に対する執着という意味においては、子ども、教師の両者とも同じであって、教師が何かを意図

すると、子どもの心が分からなくなってしまおうということの一例になるとも思うが、少し離れて見ると、ほほえましくもある一面である。

(6) マージナルなもの、その3 保育園の玩具を家に持

ち帰りたいB

〈事例1―5〉

定刻にAとBを保育園に迎えに行く。園庭で遊んでいるBに声をかけても、見向きもしないで遊んでいる(Bにとっでは、その時、私がある場に現れることが、場違いに思えたのではないかと感じ私が私にはする)。私は芝生に腰を下して、のんびりと待っている。しばらくすると、Bは横にやって来て、砂場遊び用のプラスチック製のマスを、家に持って帰りたいと言う。見ると、マスには砂が一杯入っている。先生に聞いてみて、よいという事ならば、持ち帰ってもよいのではないかと、私は答える。しかし、Bは自分で先生の所に聞きに行かずに、モジモジしている。そこで私は、Bと連れだって、先生の所にお願ひに行く。明

日また保育園に持って来るのなら持ち帰ってよい、という返事をいただくと、Bはニコリうなずいて、砂の一杯入ったマスを手に持って、素直に車に乗り込む。家に着くと、保育園ではあんなに大切なマスだったのに、もう見向きもしない。(Y保育園)

この日は、Bにとってきつと、比較的満足のいった一日であったのではないだろうか。迎えに行った私が、いつときではあれ、異なった世界の人間のようにBには写り、私が無視されたことからこの事は察せられる。保育園から帰るにあたって、その世界の象徴であった砂の一杯入ったマスが、家庭というもう一つの世界に戻るために、Bにとって必要な「物」であったのかもしれない。そしてこの場合、それがマス、すなわち物の中に蓄えるものであり、しかも、それは砂で満たされたマスであった。この事からも、この日のBの満足感、充足感といったものを、私は感じたのである。また、そのマスを家に持って帰りたいと先生にまだ伝えられないBに代

わって、私が先生にお願いした事も、Bにとってはおかたことと思う。二つの世界の代表者である親と教師が、親しく言葉を交わし、自分の願いを満たしてくれようとしている。このような会話を近くで聞くことは、Bにとっての二つの世界を縮めるのに役立つことと思う。

(7) マージナルなもの、その4 家の玩具を保育園に

持って行きたがるB

〈事例1-6〉

八月になってから十月初旬の今日まで、Bは保育園に行く時に、何かオモチャを持って行きたがる事が続いている。

それらは、毎日、必ずしも同じ物であるとは限らない。今までに持って行ったものは、ミニカー、金属製合体ロボットの一部分、プラスチックのブロック、ウルトラマン人形、ピストルなどである。同じものがしばらく続く時もある。しばらく日が経った後、再び、以前の物を選ぶこともある。その日、その日に、なぜそのオモチャが選ばれたかを見ると、登園の直前、すなわち朝食の後のひとときに遊

んでいた物を、そのまま保育園に持って行きたがることも多いようだ。保育園では、登園当初、オモチャをしっかりと握っていて離さないが、何かの遊びに没頭できた時は、その存在を忘れてしまい、思い出した時になって大騒ぎで捜している。そして、帰りにはまたしっかりと、それを手にしている。(家庭とY保育園)

こうして考えてみると、Bにとって、オモチャを保育園に持って行くことは、何か大きな意味があるようだ。

家庭での楽しい時の象徴である気入りのオモチャを保育園に持って行くことで、自分を支えていると考えてもよいであろう。

しかし、ここで忘れてならない重要な点は、Bとオモチャ、二者間だけの問題ではない。Bが気入りのオモチャを、保育園に持って行かれる為には、Bをとりまく多くの人々の、Bに対する肯定的な配慮を必要としている。その人々とは、具体的には、先生であり、友達であり、兄弟であり、そして両親である。規則を守る、とい

う一点に重きを置く教師であったならば、オモチャを保

るB

育園に持って行くことなど不可能であったであろう。実

〈事例1-7〉

際、それを禁止する一般的な理由は、いくらでもあげる

AとBを定刻（午後四時）に保育園に迎えに行くと、Bは

ことができる。また保育園での友達も、Bだけがオモ

私をみつめて、さっきつかまえたというトンボを見せてく

チャを持って来てずるい、という批判をも含めて、Bの

れる。そうして、また友達の中に戻って遊んでいる。私に

存在を認めてくれている。とくに年上の子どもたちは、

抱きついて離れなくなるわけでもないし、かと言って、私

まだ赤ちゃんなのだから仕方がない、というように捉え

を無視するというわけでもない、ある種の自然さを私は感

てくれている。この点に関しては、兄であるAも同じで

じる。遊びの区切りのつくのをしばらく待った後、家に

ある。そして親である私たちは、Bがオモチャを持って

帰って来る。夕方になって、朝、保育園に持って行ったピ

行く事で、生じるであろういろいろな不都合を予想しな

ストルを、保育園に忘れて帰って来たことを私は思い出し

がらも、それを直接禁止するという事ではなしに、Bが

て、Bにたずねると、Bは、さも前から分かっていたとい

オモチャを持って行く必要がなくなる時が来るように、

うような口ぶりで「ピストルは先生に預けてあるよ」と平

Bを見守っている。

然と言う。（Y保育園）

Bの心が少しずつ育って行くその裏には、Bを包む人

持って行ったオモチャを、保育園にBが忘れて来るこ

間の環境というものを、少しずつB自身が理解して行く

となど、それまでなかったことである。保育中に手放す

過程があるのだと思う。

ことはあっても、帰る時には先生も驚く程に思い出し

(8) マージナルなもの、その5 家の玩具を先生に預け

て、持って帰っていた。そのBが、オモチャを保育園に

置き忘れ、しかも、先生に預けてあると言って平然としている。ここに、Bの内面の変化を見る思いがする。他の子どもに対する先生の配慮から、オモチャを帰る時まで預かってあげようと先生が提案する、といったような、先生からの働きかけも、当然あった事と思う。

しかし、Bはその提案を無理なく受け入れている。このことは、登園時、オモチャを持って行くことに、少し難色を示す母親に対して「保育園に行ったら、先生に持っていてもらうから（持って行って）いいでしょ！」とBが、自ら話すことからもうかがえる。

おそらく、Bにとって家庭の象徴であるオモチャを、自分ではなく、先生が持っているのも、まるで自分がそれを直接持っていた時のような安心感を得られるようになって来ているのであろう。

そればかりでなく、さらに、先生にオモチャを預ける、というその事がBにとって、そのまま、自分自身を先生に委ねているような意味合いを感じさせているのではないだろうか。保育園という場を構成する三つの要

素である、教師、友達、物（園舎、園庭、遊具、など）に対するBの見え方が変化し始めている。そしてその裏に、常にBを支えてくださっている先生方の暖かい配慮を感じる。

ここで、少し振り返って、これまでの事例を互いに比較してみると、そこにBの内面の変化が見られ、興味深い。

〈事例1-4〉においては、Bは私をみつけた瞬間に、それまでの間、身を置いていた保育園の世界が、急に外なるものと変貌してしまい、不安定な状態へ陥ってしまった。この逆の例として、〈事例1-5〉では、迎えて来た私に対し、いつときではあるが私を無視すること、そこでの内的な世界を保とうとしている。これらに共通なことは、どちらか一方が「内」となると、同時に他方が「外」となってしまう二律背反の関係であり、二つの世界に距離があることを示している。この点は、〈事例1-2、1-3〉のマージナルな時間からも理解されよう。

しかし、他方で、〈事例1―5〉を、〈事例1―4〉と比較すると、〈事例1―5〉においては、言葉による気持ちの表明が、Bの行動を滑らかにしていることに気が付く。

自分の思いを口にするということは、ただ単に言語自身に付けた結果によるという訳ではなく、話せば自分の気持ちを分かってもらえるであろうという、相手に対する言葉以前の信頼を、その基礎にしていることが伺われる。

〈事例1―6〉を、〈事例1―5〉と比較すると、「手放す」過程というものが見られるのではないであろうか。ある物（気入りのオモチャ）を持っていなければ、自分を支えられなかった状態から、それなしでも自分を支えられるようになってきているBの姿が、そこに現れている。そして、それは、単に家庭と保育園という関係の中だけではなしに、〈マージナルなもの、その1〉においても見られるように、Bにとって、より中心的な対象である毛布への愛着に対しても、同様な変化を

見せている。

ある具体的な愛着物がなくとも、自分を支えられるようになるということは、その物を必要としなくなったという事実には違いないが、私はむしろ、その物を、内面に取り込んだ結果であると捉えたい。Bはマージナルなものを、その手の中から心の中に取り込むに従って、現実の世界では、先生や友達を身近なものとし始めている。そこにBの内的な世界における「内」の広がりや、私は見るのである。（お茶の水女子大学附属幼稚園）

参考文献

- (1) Bowlby, J., 1969 "Attachment and Loss, Vol. 1 attachment". The Hogarth Press. (黒田実郎他訳一九八〇 母子関係の理論(1)愛着行動 岩崎学術出版社)
- (2) Bowlby, J., 1973 "Attachment and Loss, Vol. 2 Separation: Anxiety and Anger". The Hogarth Press.

(黒田実郎他訳一九八二 母子関係の理論(2)分離不安

岩崎学術出版社)